

前回は引き続き、自動詞「いさむ」から見ていきたい。「いさむ」が「〇〇なら□□」という形式で頻出することはすでに述べたが、「いさんで〇〇する」というかたちもしばしば登場する。「いさんで」とは、「いさむ」の連用形「いさみ」に接続助詞の「て・で」が付加され「いさみて」となり、さらにその「み」が撥音便化されたものである。「いさんで」は、「いさんで〇〇する」のかたちでは、自動詞「いさむ」と「〇〇する」を「て」で単純に接続したものと解されるし、また、「〇〇する」の様態を表すために副詞的に用いられているともいえる。こうした形式における「いさむ」の意味内容を、それに接続される動詞との関連で考えてみたい。

まず、「心いさんでくる」（一号9、二号2）という表現がある。「くる」は自動詞「来る」の終止形で、「いさんでくる」は「自動詞+自動詞」のかたちを取っている。二号2では「上たるハ心いさんでくるほとに／なんどきにくるこくけんがきた」と、「心いさんで“くる”」「なんどきに“くる”」「こくけんが“きた”」と「くる」が繰り返されて、「いさみ」と「こくけん」（刻限）の到来（「くる」）が関連づけられている。

次に、「心いさんでせきこめよ」（四号76、六号17、七号49）という表現がある。これは「自動詞+他動詞」というかたちで、「心いさんで」は単純な接続というより、「つとめ」を「せきこむ」在りようを副詞的に説明しているといえよう。「せきこめよ」は他動詞「せきこむ」（急ぎ込む）の命令形であり、その動作主体は人間である。つまり、親神が「せきこむ」のではなく、人間に「せきこむ」ことを求めている。「せきこむ」内容は、四号75では「ほんみちつけるもよふ」、すなわち「てをどり」や「かぐら」を勤める為の段取りと解され、六号17でも同様に「ほんみち」という言葉が用いられて、「つとめ」の文脈で歌われている。他方で、七号49では、「つとめ」のテーマはいったん背景化されて、前後に「はやくねがゑやすぐにかなうで」（46）や「たすけ一ぢよせゑているから」（47）、「月日よりぢうよぢぎいをしんぢつに／はやくみせたいこれが一ぢよ」（50）と歌われていることから、明示的には「たすけ」を「せきこむ」ことが求められていると解される。

「しんぢつに心いさんでしやんして／神にもたれてよふぎづとめを」（四号49）という表現では、「心いさんで」は、「しやんして」と「神にもたれて」の両方に掛かっていると読み取れる。あるいは、「よふぎづとめを」の後に省略されているであろう動詞（たとえば「せきこめよ」）を修飾しているとも解される。いずれにしても、「よふぎづとめ」に向かう道程においては、「しやん」すること、神に「もたれる」こと、あるいは「よふぎづとめ」を遂行することがそれぞれ接続助詞「て」で結ばれて継続的な連続性を示しているが、それらのどの段階においても、その様態は「しんぢつに」という副詞と共に「心いさんで」という表現で示されているといえる。

また、接続助詞「て」を伴わず、「いさみくる」と連用形「い

さみ」に直接「くる」が接続する場合（二号4、四号19）もあり、「いさむ」という作用に「くる」という意味を補足している。また、「いさみ」にはしばしば「でる」も接続されており（一号14、二号17、三号143、四号35、十号63、82、十四号59）、「あられる」にも通じる在りようが伝えられている。さらには、「心いさんて」という表現は、「心いさんてよふぎづくめや」（三号54）と名詞が接続される場合もある。

こうして見てみると、「いさむ」という動作・作用は、一過性の「点」でイメージされるものではなく、暫時的な「線」、あるいは「せかい」を包むほどに広がりを持つものとして捉えられる。それは「くる」のものであり、また「でる」のものであるから、到来しつつ発現するものといえよう。親神は、「つとめ」の勤修や「たすけ」を急がれているのだが、そのプロセスもまた「心いさむ」ものとして表現される。

さて、次に、他動詞「いさめる」についてみていきたい。格助詞「を」に着目すると「せかい一れつを」（五号68、十号81）と記されている。また「を」でマークされてはいないが「いさめる」対象としてはやはり「せかいの心」（一号8、二号1、三号114）が示されている。「上下ともに心いさめで」とも歌われるように、「いさむ」と同様、一部の心や個人個人の心のみを問題にしているのではないことが読み取れる。

「いさめる」主体は、第一に親神である。人々の心（とりわけ「せかいの心」）を「いさめる」目的・理由は、「いちれつにはやくたすけをいそぐから」（一号8）と歌われている。その道程・段取りは直接的に「たすけるこのよふ」（三号142）と示されつつ、「をくはんみちをつけかける」（二号1）や「にほんをさめるもよふ」（三号114）とも記されている。親神は、「つとめ」の段取りを整えることに関連で人々の心を「いさめる」といえよう。

また、「いさめる」「だんへとにちへ心いさめかけ／よふぎづくめをみなにをしへて」（十号61）とも表現されている。ここでは、前首で「それからハ一れつなるのむねのうち／わかりたならば月日それより」（十号60）と歌われて、親神の胸のうちは人々が分かったなら、それからだんだんと心を「いさめかけ」て、陽気づくめの世界を皆に教えると説かれている。ここでは、心を「いさめる」という働きと「ようぎづくめ」を「をしへる」という働きが並列的に示されており、ともに「だんへと」「にちへ」という日常に根差した漸次的なプロセスでなされることが伝えられている。

他方で、「いさめる」主体が人間の場合もある。一号13の「いづまんよふとはやくいさめよ」がその用例で、ここでの「いさめよ」は命令形であり、親神が人間に「いさめる」ことを求めている。この文脈での、「いづむ」のは、農作物（「立毛」）であり、それを「いさめよ」と命じている。つまり、農作物を実り豊かなものにせよ、と歌っている。そして、そのためにこそ「かぐらつとめやてをとりをせよ」（一号14）と再び命令文で伝えられている。